

## 【第1部】 アーカイブスの【データを集める】

【司会】 それでは、シンポジウムを開始いたします。最初に、今回このシンポジウムを開催する場所を提供していただきました、遠野市の本田敏秋市長に開会のご挨拶をいただきたいと思います。市長、よろしくお願ひします。

### 膨大な記録を生きた教訓として伝えたい

【本田遠野市長（写真右）】 こんにちは。この東日本大震災は今日でもって210日を経過し7か月になろうとしています。この現代の21世紀の日本で起きた大変な災害であったわけであります。今だもって、行方不明になられた方で家族の元に戻れない方、まだ身内を捜し求めている方がいるというこの現実の中に、私は今般の東日本大震災のすさまじさというものが表されているんじゃないのかなと思っているところです。



このすさまじい災害であったということの一方におきまして、カメラやビデオ、あるいは携帯電話やインターネットなどを通じて、人類の歴史の中でもこれほど多くのメディアやコンテンツに記録されたという災害も、過去には例がなかったのではないのかなというようなことを、さまざまな情報誌や多くの識者の発言からも、私もまさに事実であるといふふうに感じているところでもあります。

さまざまな映像を見ながら、真っ黒な、あの黒く押し寄せてくる津波の恐ろしさということも映像を通じて知りました。しかも、これがまた現実の場にあったのであれば、どれほどの恐怖であったのかということも、一つの事実として認めざるを得ない、という部分があるのではないかと思っております。

こういった膨大な記録を後世に伝え、文字どおり生きた教訓としていく上で、今日のこの企画は、私は大変、大変大事なものではないのか、大きな意味を持っているというようにも理解しているところです。

### 遠野市にとっても大事な支援となる

本日は、この場にハーバード大学ライシャワー日本研究所のアンドリュー・ゴードン所

長さんにもおいでいただいております。そしてまた、東北大学の今村教授、東京大学の吉見教授、関西学院大学の畠教授、大学関係者の皆様がこうしてお揃いであります。

そしてその他にも、まさに現場で大変な陣頭指揮をとっております釜石の野田市長さんはじめ、陸前高田市あるいは大船渡市といった行政関係者の皆様もみえての議論ということに位置づけられております。沿岸被災地の市町村の皆様は、私も市長という職をしておりますけれども、この発災以来、大変な、大変な、まさに市民の安心・安全ということに、不眠不休の中で陣頭指揮をとっているわけであります。その中において、今日ここに駆けつけていただき、この膨大な記録をいかにして後世に伝えるのかという取り組みにも参加いただきましたことに、心より敬意と感謝を申し上げたいと思っている次第であります。

この被災地の失われた過去の記録をデジタル化し、それをきちんと記録し、再生する、被災した現在のこの姿を、未来の映像にきちんと資料としてデジタル化しながら記録していくというこの作業も、私は大変、大変重要なものであると思っております。この遠野市をこのような形での企画として位置づけていただきましたことに感謝も申し上げます。後方支援活動を展開してきた遠野市にとっても、たいへん大事な支援の一つの役割ではないかと思っております。

#### 犠牲になられた方々に対する残されたものの役目でもある

おにぎりを送り続けた、救援物資を送り続けた、それでもって後方支援活動が終わったという気持ちは、(遠野の) 3万市民は持っておりません。これを文字どおり後世にこの災害の記録といったものをきちんと伝えるか、新たな仕組みを築き上げていくかということが、多くの犠牲になられた方々に対する我々の一つの役目であり、一つの立場ではないのかなということも思っています。

このシンポジウムはインターネットを通じて全国に生中継されていると聞き、大変な方々が、200人に満たないこの小さな会場から全国のネットワークに、あるいは世界のネットワークにつながるという役割もあるんだということに、改めて緊張しているところでございます。

5時間に及ぶこの長時間の議論が、震災のこの機に、新しい時代にふさわしい仕組みとしてつながっていく場となることを心からご期待申し上げまして、地元としての挨拶にかえさせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

【司会】 本田市長、ありがとうございました。

それでは続きまして、「3・1・1まるごとアーカイブス」という活動の世話人の一人である、東北大学大学院の今村文彦先生にご挨拶いただきます。

### 過去—現在—将来の時をつなぐ

【今村（写真右）】 東北大学の今村でございます。世話人の一人としてご挨拶をさせていただきます。

今回の大震災、未曾有の被害を受けました。我々、東北大



学で津波の研究を数十年にわたって行っておりますが、2004年スマトラ、またこの三陸の地におきましては明治三陸に匹敵、またはその内容におきましてはそれを上回る被害でございました。東北大学でも亡くなつた学生を含めて多大な被害を受けました。まだまだ復旧の途上でございます。

そういう中で、我々は2つのことをつなげたいと思っております。1つは時をつなぐことです。今回震災を受けて過去の記憶というのは残念ながら無くなつたわけでございますが、それを再生する努力が必要だと思っております。2つ目は、今回の状況をしっかりと記録すること、現在でございます。3つ目はその現在から将来に向かって、この復興の姿をきちんと残していく、これが後世にとっても非常に重要であるかと思います。過去—現在—将来の時をつなぐことです。

### 地域や国内外の人々をつなぐ

また、もう一つは地域をつなぎたいと思っております。被災の地域、またそれを支援する地域、国内外のいろいろな方をつなげたい。そういう意味で、このアーカイブというのはまさにその中心的な役割を担っていると思っております。今現在、6か月たつて、さまざまなデータが取れ始めてきたわけでございますが、まだまだ課題がございます。その課題を今日皆さんと一緒に議論し、またそれをどう活用するのか、現在において、また将来においてどう復興につなげるかというところを話し合いたいと思います。

現在、我々、大学等で復旧の支援を考えているわけですが、やはり歴史的な視点というのが大切です。過去も同じような被害を受けました。現在も受けており、それから復旧を

目指しております。現在と過去を対話するもの、それが歴史であるかと思います。過去を学びながら、今、我々には多くの課題がありますが一緒にそれらを解決していきたいと思います。どうぞ、本日よろしくお願ひいたします。(拍手)

【司会】 今村先生、ありがとうございました。

それでは、これから第1部を開始したいと思います。第1部は、この「3.11まるごとアーカイブス」にかかるわっている沢山のプロジェクトがございますが、その関係のプロジェクトを1つずつ順番にご紹介したいと思います。

それでは、スクリーンの用意をお願いします。皆様、お手元に資料があると思うのですが、その資料の順番に従ってこれからご紹介したいと思います。最初にシンポジウムの目的、趣旨につきまして、この「3.11まるごとアーカイブス」の世話を一人、独立行政法人防災科学技術研究所の長坂から、皆様にご挨拶させていただきます。

#### 復興を支援していく応援団を広げたい



【長坂（写真左）】 防災科学技術研究所の長坂と申します。私どもは国の防災研究機関でございます。被災直後からこちらの遠野市、大船渡、陸前高田、住田町、または宮古、釜石に行き、被災地の方々に私たちは何を貢献、お手伝いができるのかということで、このアーカイブのプロジェクトを、地域の被災した自治体さんまたは地域のコミュニティの方々のご要望等を聞きながら、進めさせていただいております。

今日は、実際に地域の方々と一緒にこのアーカイブを取り組むなかで、まずどういうミッションで、どういうコンテンツが、どういう思いで集められているのか、またどんな課題が今後あるのかというようなことを、実際のなるべく生の携わっている方々の声を聞きながら、1部を進めさせていただきたいと思います。

先ほど本田市長からもございましたが、被災地はまだまだ復興の緒についたばかりということで、多くの犠牲になられた方々に、改めてお見舞い申し上げます。今回、一緒に被災地を盛り上げていこうとシンポジウムを催しましたが、何か外から来た方々がいろいろな思いでやられて、それで終わってしまうということが多々あるかと思います。今日は、さらに被災地の復興を支援していく、皆さんができる応援団を広げていくというシンポ

ジウムにしていきたいと考えていますので、半日になりますけれども、どうぞよろしくお願ひいたします。

進行は防災科学技術研究所の坪川さんにお願いしたいと思います。(拍手)

【司会】 長坂さん、ありがとうございました。

それでは資料で概要を説明させていただきます。シンポジウムの目的につきましては、今、長坂からご説明したとおりですが、次のページに今日の予定が書いてあります。第1部、「アーカイブスの【データを集める】」というところから開始したいと思います。

全体の第1部でご紹介するこのアーカイブスのプロジェクトは、1番から13番まで13個ございます。今もこれは増え続けております。基本的にはこの災害によって沢山の記録が失われてしまうことを防ごう、ということがまず第一にあります。そのために、さまざまな情報を集めていくということにありますので、それについて順番にご紹介したいと思います。

### KOM～気仙を多いに盛り上げたい！

では、1つ目のプロジェクトからご紹介したいと思います。

大船渡、陸前高田の若者を中心とした画像、映像、インタビュー等のアーカイブ、KOMです。KOMとは「気仙を多いに盛り上げたい！」の頭（文字）をとってKOMとなっております。そのプロジェクトについてご紹介します。

現在の活動地域は大船渡市と陸前高田市ということでございます。活動体制といたしましてはインタビュー、映像取材活動、陸前高田、大船渡出身の4名の方々が今おります。その方々をご紹介します。どうぞ立ち上がってください。これがKOMのメンバーです。

皆さん、拍手をお願いします。(拍手)

ありがとうございます。彼らはこの被災地の出身で、被災者の家族でもあり、被害者自身でもあります。現在、この方々は寄付金にて1年間雇用されているということで、地元NPO、行政、産業界、学校、地域コミュニティとの協働で活動しているという状況であります。活動内容は、流された写真・アルバム等の返却活動。これは陸前高田の緊急雇用による臨時スタッフ2名の方がいます。それから、NPO等被災地域外のボランティアスタッフ、民間事業者との協働で行っているということになっています。

活動状況がそこにIからIVまで出ていますが、復旧・復興過程の取材と編集、ホームペ

ージ等への公開ということです。現代の若者ですので、こういうパソコンの技術、インターネットの技術に長けておりますので、地域の被災の状況について、情報を発信していくという活動を中心にやっていただいております。これは被災者の避難生活、復興過程の調査、それから災害ボランティアの活動、ボランティアの体験談を集めるとか、地場産業、商店等の復旧・営業再開の取り組み等がございます。

2番目として、津波で流された写真やアルバム等の保存・洗浄・返却活動があります。

3つ目が被災前のまち並み、風景、文化財、伝統行事、イベント等の映像収集とデジタル化というのがあります。

4番目に住民による映像記録支援ということで、これは後でプロジェクトとしてご紹介しますが、被災地でつくった、地元の方々がつくった情報発信の一つの手段として映像記録というのがありますが、そのワークショップの支援もしていただきました。

写真で活動状況が載っています。いろいろな形の活動が行われているということでございます【下の写真】。



主な成果、コンテンツとしましては、地域の復興の取り組みを写真、ビデオ、インタビュー等で取材し、eコミュニティ・プラットフォームに順次公開ということになっています。このeコミュニティ・プラットフォームというのは、私どもの防災科学技術研究所が開発したインターネット上のソフトウェアでございまして、地域の方々が、特にコンピューターの専門的な知識がなくても、いろいろ

KOMプロジェクト in 大船渡

新着情報!

2012年1月34日 12時41分

KOMから今年の抱負

2012年。仕事始めの今日1月4日、KOM4人の運営込みを掲載します。

残すところあと3ヶ月になりました。今までとは少し違う内容で活動を始めています。自分がやるべきことを明確にし、それを実行していくことです。肩に付かれることは一つでも多く勉強して、成長していきたいと思います。

KOM とは

Kem wo Oni Monageta

ー 話題を大いに盛り上げたい

ー という想い字に出来てしまひます！

米崎周一なかの人はこんな人

るな情報をブログに書き込んだり、写真を張りつけたり、動画で公開したりということができるようなソフトウェアになっています。これを使って情報を発信していただいているということです【前右図（KOMプロジェクトin大船渡）】。

事業者や商店等の営業再開の取り組みを、マップにて公開するということになっていきます。これはKOMの活動しているページにはこの地図で、どういうところの商店が動いているというのが見られるようになっています【地図下】。

インターネットの画面は、別にこちらにご用意したディスプレーのほうでも出るようになっていますので、そちらでご覧いただければと思います。それから、地場産業等のeコマース、これもまた別のプロジェクトで公表しますけれども、結局この地域で活動しているアーカイブに関する取り組みのほとんどすべてを彼らが集めて、情報發



信していただいているという形になります。取材から発信までという形になります。

次が今後の課題と展開ということですけども、現在の活動の課題としましては、行政や地域コミュニティの復興まちづくりの計画、事業推進をめぐる会議や意見交換会を記録していくという問題があります。それから仮設住宅や仮設グループホーム、仮設商店街等の長期的な継続取材をする必要があります。また、避難行動や被災体験、後世へのメッセージのより多くのインタビューの収集が必要になるということです。

被災地でいろいろな復興会議が行われているのですけども、なかなかこういう若者がかかわることはないので、そういう意味では、若者の目線で被災者の状況を把握していくという貴重な活動ではないかと思います。今後の展開としては、地域コミュニティとの連携・協働を強化し、多様な復興活動を収集する、仮設住宅等被災地のコミュニティへの情報提供と広報活動支援というのがあります。

ということで、KOMのメンバーの活動をご紹介しました。長坂さん、これに質問とかございますか。

【長坂】 実際にかかわっている4名の方々で、今、集めていくときにいちばん苦労して

いる点ですとか、また今後の課題として挙がっている、地域から情報を集めるだけじゃなくて、逆に発信もお手伝いしていくというようなことをどうやっていけばいいか、というような視点から少しコメントをいただければと思います。

**【千葉（KOM）写真右】** 僕たちがつくっているホームページがあります。そこに、イベントに行って取材して撮ってきた写真だとか、市民の皆様に聞いたお話なんかをちょっとアップしています。これからもホームページで、やっぱり地元の僕たちにしか聞けない声というのがあるので、そこを強く意識して、そういう声をホームページなどにアップしていかなければいいかなと思っています。



**【司会】** ありがとうございました。KOMの活動にはいろいろなものがありますが、そのホームページ（大船渡：<http://311archives.jp/group.php?gid=10295>、陸前高田：<http://311archives.jp/group.php?gid=10291>）にアクセスしていただいて、地域の若者がどんなことを言っているのかというのをぜひ聞いていただければと思います。

#### **アイアン・ハート～様々な教訓・写真・映像・想いの収集と整理、検証**

**【司会】** 続きまして、次はちょっと新しいのですが釜石のほうへ行きたいと思います。釜石、ここも大変大きな被害を受けた所でございますけれども、ここでもアーカイブの取り組みが行われております。チーム名がアイアン・ハートと言います。釜石は鉄の町ですので、それにちなんだアイアン・ハートという名前になっています。「様々な教訓・写真・映像・想いの収集と整理、検証」ということになっています。現在活動しているのが、こちらも4人の地元の方です。釜石市在住の方4人、今ここに来ていただいております。

じゃあ、アイアン・ハートのメンバー、ちょっと立ち上がってもらえますか。ありがとうございます。今日、このシンポジウムの受付もやっていただきました。ありがとうございます。（拍手）

現在の活動状況としましては、復旧・復興の取材と編集、ホームページ等への公開ということで、今被災地でアーカイブの一つの重要な活動を行っています。災害の記録を集めなければならないという状況にあるのですけれども、インターネットの時代であっても、

実はなかなか記録が集まらないんですね。それで、地域の方々がまめに取材をされたり、まめに回っていただいて、写真とか動画を集めてもらっています。地元に行っている方々にご活動いただくというのが、とても重要なことになっています。それから復旧・復興過程のまちなみ、風景、イベント等の取材、地場産業、商店等の復旧・営業再開の取り組みということで、こういうのを集めて情報発信していく形になっています。

2つ目として、被災前のまちなみ、風景、文化財、伝統行事、イベント等の映像収集とデジタル化ということで、被災地で失われてしまったものについても集めるという活動をしています。次が活動の様子ということで写真が載っております【写真下】。



現在、この釜石のインターネットのページにはたくさん的情報が出ていますが、主な成果・コンテンツとしましては、地域の復興の取り組みを写真、ビデオ、インタビューなどで取材して、eコミュニティ・プラットフォームにて順次公開しています。

<http://311archives.jp/index.php?gid=10163>

それから、事業者や商店等の営業再開の取り組みについてもマップで公開しているという状況です。また、ユーチューブとかニコニコ動画というのがありますが、

それにアップされているサイトの動画も集めさせていただく、という活動をしているということです。

課題と展開ですけれども、行政や地域コミュニティの復興まちづくりの計画や、事業推進をめぐる会議や意見交換会を記録する、これはこちらの大船渡等と同じになります。また、仮設住宅や仮設グループホーム、仮設商店街等の長期的な継続取材、避難行動や被災体験、後世へのメッセージのより多くのインタビューの収集ということが課題になっております。

今後の展開としましては、「記録」と「記憶」、様々な教訓・写真・映像・想いの収集と整理・検証・定点撮影・復興杭（別のプロジェクトで紹介）、それらのピックアップ、地域コミュニティとの連携・協働を強化し、多様な復興活動を収集する、仮設住宅等被災地のコミュニティへの情報提供と、広報支援活動ということになっております。

今度は私のほうから一つご質問したいと思います。アイアン・ハートの皆さんには、先ほどの若い人たち（KOM）より成人されている方々が多いんですけれども、今日は有名な釜石市長さんにお越しいただいています。釜石市の将来を憂いでいる若者として、この場を借りて市長に何か一言言っておきたいことがあつたら、ぜひご発言いただけませんでしょうか。



【柴田（アイアン・ハート：写真左）】 釜石アーカイブスの柴田です。今は動画や写真がなかなか集まらない状態で、市との連携も図りたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。（拍手）

【司会】 ありがとうございました。

釜石市長には、後でご挨拶をいただきます。市長は「撓まず屈せず」ということで、地域がこの災害で「撓まず屈せず」の精神で、ぜひ立ち上がりいただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

#### 株式会社ダイナックス都市環境研究所～気仙沼の映像、画像のアーカイブと展示

それでは3つ目のプロジェクト、これは気仙沼でございます。気仙沼は宮城県ですが、こちら（岩手県）の大船渡、陸前高田とはほとんど地続きのような形で、気仙地域として一体的に動いている所でございます。「気仙沼の映像、画像のアーカイブと展示」ということで、今日は気仙沼で活動しているダイナックスさんに来ていただいております。

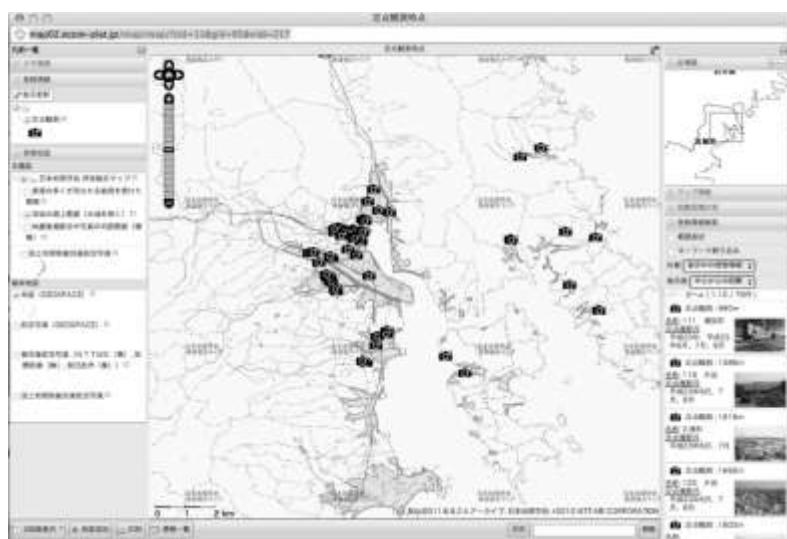
現在の活動状況ですけども、気仙沼市出身者の2名が常勤しており、気仙沼市危機管理課の全面協力をいただいて、いろいろやっているということです。気仙沼もご存じのように火災が起きたことがあって、相当ひどくやられています。こういうNPOもそうですが、活動する場所の確保からスタートしなければならないということで、今、市が全面的に協力しています。



活動状況としては、地元写真家集団「鼎（かなえ）」と連携した定点観測、これは市内100ポイントということで、後ほどご紹介しますが気仙沼には大変たくさん写真が集められています。提供していただいた写真を使った写真展も開催しています。気仙沼向洋高校の生徒会・写真部、江戸川区等で催されているということです【写真上：気仙沼市役所での被災前の写真展示】。

それから神戸大学、横浜市立大学「記憶の街」ワークショップ（模型づくりワークショップ）と連携して、オーラル・ヒストリーといって、災害を体験された方が自分でしゃべられたことを記録しています。ブログによる発信・周知・記録、NPO・ボランティアとのネットワーク構築ということで、情報交換、協働事業の検討をしているということです。

それから、下のほうに地図がございますが【地図右】、これが定点と呼ばれているものです。この地点は個人の敷地ではなく、誰がそこで写真を撮っても大丈夫な場所として、これから地域の変化を見ていく大事な所を定



点と呼んでいます。そこにカメラのマークが出ていますが、この写真・記録を残しておくことで、この災害をデジタルで保存しようということでございます。右側には記憶の街ワークショップ、模型づくりワークショップの写真が載っています【写真下】。

主な成果、コンテンツですが、これもブログで活動状況等を発信中ではありますが、まちの復興過程の記録、大島フェリー航路（大島は気仙沼港の外にある大きな島）と、港町の定点観測等をeコミマップで発信したり、避難行動の調査、聞き取り結果をまとめたり、収集した写真を活用した写真展を通じた市民・全国各地への情報発信、というのをやっていただいております。

課題と今後の展開ですが、ネットワーク、常勤スタッフだけでは十分に動けないため、地元組織、市外から支援に入っているNPOとかNGOと連携したプロジェクトの展開が必要だということです。今後の展開としては、地域の実情を多角的に記録していくとともに、市外、県外、海外への積極的な情報発信を目指すということになっております。

ダイナックスさんもぜひ、何かコメントお願いできますでしょうか。



【津賀（ダイナックス：写真左）】 気仙沼でこのプロジェクトを進めています津賀と申します。現地のスタッフと一緒にやっていますが、いろいろな方からお聞きするのに、復興というもの感覚がやっぱり一人ひとり違うというのがあります。支援に入られている人の情報というのも多々あります。やはりいろいろな方とつながりながら、この復興の過程というのを記録していきたいと思っています。また、気仙沼のほうに来られることがあったら、市役所のほうに事務所がありますのでぜひともお立ち寄りください。よろしくお願いしま



す。(拍手)

## 夢ネット大船渡～災害体験のオーラル・ヒストリー——被災体験者からのメッセージと避難行動の聞き取り

【司会】津賀さん、ありがとうございました。

次は4番目、「災害体験のオーラル・ヒストリー」、被災体験者からのメッセージと避難行動の聞き取りをしています。実は今回、津波によって多くの方々が避難はしたもの、避難場所が適切でなかつたり、あるいは避難ができなくて、あるいは避難しなくて亡くなられた方がたくさんいらっしゃいます。亡くなられた方にはもう声を聞くことはできないのですが、生き残った方々がどんなふうに避難したのか、そこにどんな問題があったのかということを、なるべくきちんと記録しないと次の災害のために生かせませんので、それを聞くということをやっています。

それから、災害を体験された方々が後世に何をメッセージとして残したいのか、それを集めさせていただいて発信していくということです。現在の活動状況ですけども、第1期として、9月末まで大船渡地区を中心に50名の方々にインタビューをしました。体験者の声、未来の被災者に残したいメッセージということで、現在ウェブに50名の方々の短いメッセージを集めて公開しております。これは専門家が行ってインタビューをするのとは違って、地域の方に自由に語っていただいているので、誰でもインタビューはできます。現在地域で活動しているNPOの夢ネットさんに今日はお越しいただいています。

夢ネット大船渡さん、どうぞ。(拍手)

一応個人情報が結構かかっており、お名前はちょっとお出ししないということで、今回は活動の様子を見ていただきます。ここに写真が出ていますが、インタビューしたのを公開するのに、ご本人が同意したということでのお名前を書いていただいたり、おおよその年齢とか性別、地域というぐらいだけでお名前は出さない形で、公開させていただいている【写真下】。



次の音声は、インタビューした方が実際に発言した一つのメッセージのサンプルです。  
ぜひ聞いてください。

### 【録音再生】

「ほんと被災に遭ってね、まあ、ほんとに恐ろしがったです。逃げるときも孫たちの手を引いて高台に逃げました。それで、そのまあ、その孫たちにも、これがその津波なんだって、すごくおつかねんだからって、よくこの津波のごどを忘れないで、その見どげって言つたら、ほの孫たちも身を乗り出してこう見ました。その孫は6歳と4歳です。それでまず、はあ、おつかねんだなあって感じたのは、高台で眺めた範囲のごどです。

そんでまず、いち早くまず避難することが大事だだと思います。それで、まず、今はその貴重品とか身の回りの物は、寝るときは懐中電灯、まあ、貴重品、まずそろえて、まず常に即避難ということを心がけています。

あれですか、千年後っていうと、やっぱり今どは時代が変わる、変わっておると思います。まあ、我々もこの世には存在しないけれども、まず、その津波のよう大きさにはもう変わりないと思いますから、まあ、常に避難ということを頭には置いて、まず過ごせるほうがはないと思います」

【司会】 はい、ありがとうございました。これは大船渡市赤崎町に住んでいる女性（65歳）の方の声ということになります。

じゃあ、次お願いします。今のはちょっと長いんですけど、「3.11まるごとアーカイブス」にはもっと短いメッセージが50件ほどあり（今はもっと載っています）、他に長いのをこれから整理して、公開していくことになっています。

課題ですけども、実はインタビューするのになかなか時間がかかるって、仮設などへ行ってお話を伺うのですが、被災者の中にはまあ大変つらい体験だったんで、語れないという方もいらっしゃいます。それでもご協力して、ぜひ一言話しておきたいという方は結構いらっしゃいますが、やっぱり時間がかかるということで、今のところわりと高齢の方中心の取材となっています。ですから壮年層、若年層への聞き取りが少ないと問題があります。

それから、時間がたつとやっぱり皆さんのお話が大分変わってくるんではないか、

ということです。今は仮設に入っていて、被災当時の辛い体験は結構生々しいわけですが、これから復興していくにつれて別のいろいろな課題が出てくるだろうと。それもまた地域の声ですので、集めていく必要があるのではないかということです。今後の展開としては、地域である程度まとまった集団、例えば子ども会のお父さん、お母さんですとかにグループで話を聞くとか、アンケートのようなわりと簡単に声を寄せていただく仕組みをつくろうか、ということを検討しております。

これは長坂さん、何かご質問とかありますでしょうか、実際の当事者の方々に。

【長坂】 ぜひ、夢ネットさん、今日来ていただいているので、今後どういう形で地域と、また行政の方々のご支援もいただきながらこれを進めていけばいいのか、というようなことを少しコメントをいただければと思います。

【鈴木（夢ネット：写真右）】 一応、すぐ入っていくというのは難しいようなので、前の日あたりに行って、「明日来ますのでお願いします」というようなことでやってきました。もう少し入っていって、くだけた話で何か質問するようなことがあれば、もっと気軽に聞けるんじゃないかな、という感じがしました。やはり被災した方々ですので、思いっ切り最初からぶつけ本番でやるというのは難しかったですね。



### 被災自治体の市民記録による災害映像、画像の収集

【司会】 ありがとうございました。ということで、ぜひ、被災者の声というのを残したいと思いますので、これにご協力いただける方は、大船渡でしたら夢ネットさん、あるいは私たちの研究所のほうへ直にいただいても結構ですので、ぜひご連絡いただければと思います。

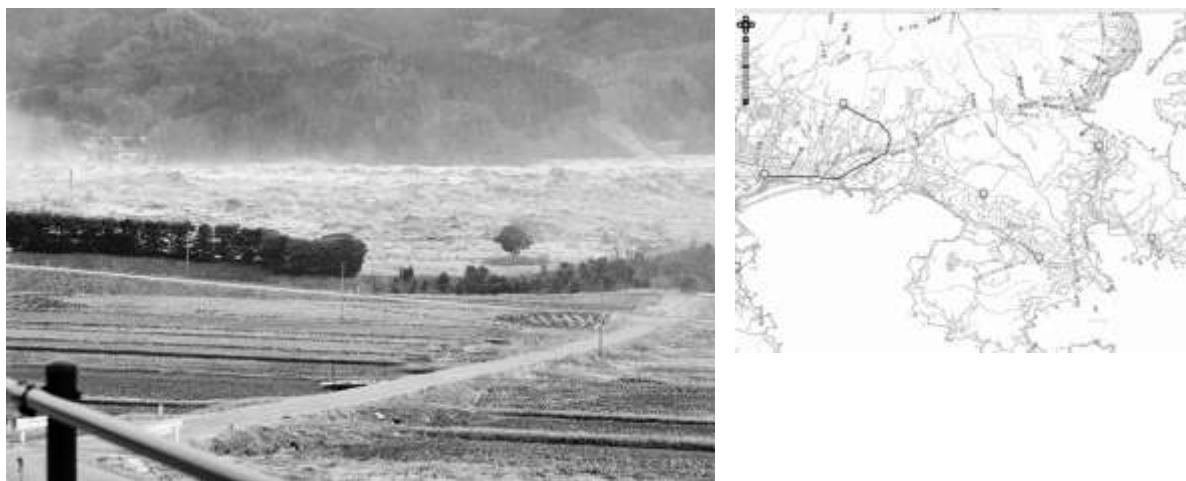
それでは、5番目のプロジェクト、「被災自治体の市民記録による災害映像、画像の収集」とということで、これは実際に被災した地域の住民の方々が撮られたビデオですとか、写真ですとかというのを集めるという形をしております。これはかなりあるのですが、一時期はもうユーチューブなんかにたくさん載ったんですけども（今は大分減って少なくなって

います)、これも市民の方々に呼びかけて集めさせていただいております。

撮影場所が特定できるものにつきましては、eコミマップというのがあります。これは私どものeコミュニティ・プラットフォームというシステムで使っている地図ソフトがあり、地図でその地域の情報を管理していくことができるようになっています。どこにどんな写真が撮られたかということを、空間的に特定してやっていくということあります。

これまで26名の方々から、約3,200枚の画像と75本の動画をご提供いただきました。これは住民の方々ですが、岩手県と宮城県の被災自治体からは、県を含めて市町村全部に声をおかけしまして、その結果、1万5,000枚というかなりの分量の画像と動画をご提供いただいている。今日はその一部をご紹介します。

最初にご紹介するのは、これは陸前高田市の小友町という所です。地元の方はご存じですが広田半島というのがあり、左手が広田湾、右手が大野湾という2つの湾から津波が入ってきて、真ん中の低地の部分が両方から来た津波でぶつかってしまって、完全に分離してしまったという場所です【地図右】。これは、高台の所から左側から来る津波と右側から来る津波がぶつかっている所を捉えたという、非常に貴重な写真です【写真左】。



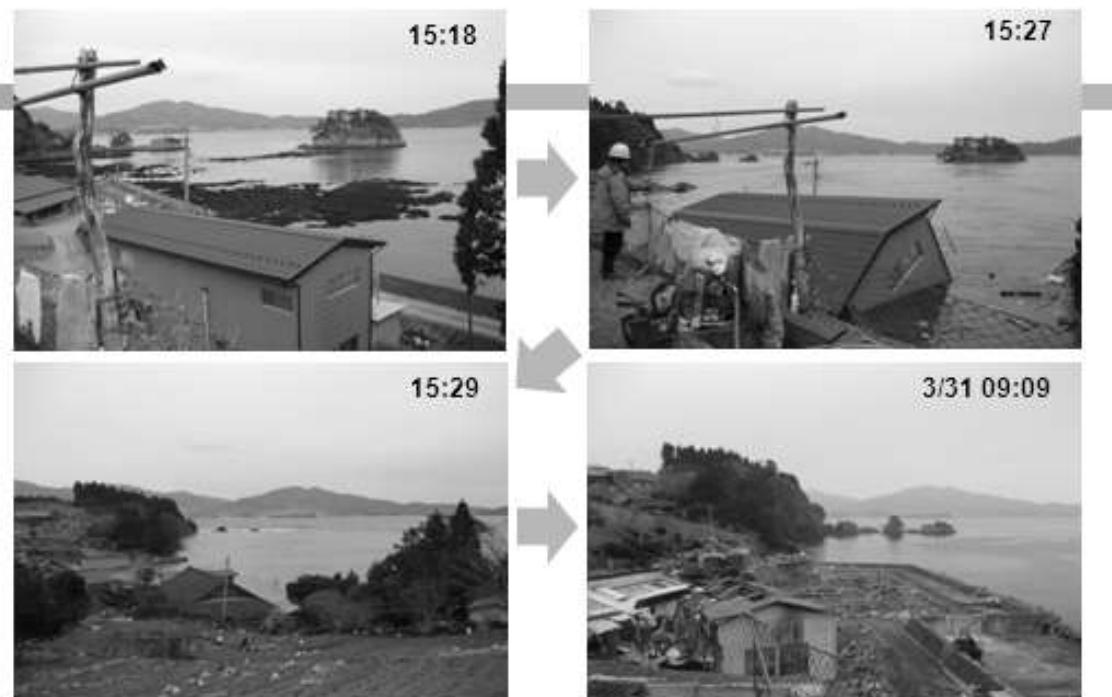
次の写真は陸前高田の古谷というところです。ここに住んでいるYさんという方が撮られた写真で、これはデジタルですので時間が記録されています。あまり時間が違っていないかったということがわかりましたので、その時間をこの上に入れておきました。

左上の写真は15時18分【写真次ページ】、これは水が引いてしまった所です。沖にあるあの島の岩礁の部分が下までむき出しになっています。こんなことはないということでこの写真を撮られたのが15時18分、右の写真が15時27分です【写真次ページ】。このときはもう津波がヒタヒタと来て、今見えていた岩礁の部分が大分水に浸かっています

が、あれが最後はすっぽり見えなくなるまで水が来たというところです。

3番目の写真は、さすがに水が来たときにはそこにいると怖いので、高台に上がって写真を撮られたのが15時29分【写真下】。この段階で、この古谷という集落に水が入ってしまって、岩礁はほとんど水没してしまったということです。水の高さを測ってみたら、海面から約17メートルという非常に高いところまで水が来ていることがわかりました。右側の写真は3月31日の朝ということになります【写真下】。

#### 津波前後の海岸線の変化(陸前高田市古谷地区Yさん提供)



次の写真はV字型の湾が右に開くような形で開いています。次の赤丸の所が写真を撮られた方の家です【地図次ページ】。断崖の上にあって、海面から17メートルぐらいの所です。この方は家族を連れて左上にある公民館までこうやって逃げました。隣の家にいる小学生も連れて逃げたということになります。その後、その緑のところに住んでいらっしゃる方に、実はお声をかけたんですがなかなか避難しなかった。それをシブっても避難させたというのがこの緑のルートになります。その次に道路の所です。茶色い所が、上のほうにある港からの車で渋滞していたという状況を示しています。そこに、次の津波が入ってきたということです。

こうやって見てみると、結果的にこの集落は、下の低いところの家は全部やられてし

まっていますが、けが人一人も出なかったという、地域の方々が連携して避難したという、非常に珍しい所ということになっております。

## 陸前高田市気仙町古谷集落の津波避難



次は動画です。ちょっと大変ショックが大きい部分もございますので、今回は音声を消して再生していただこうと思います。2つこれからご紹介します。

1つ目は大船渡市の齋藤賢治さんのです。実はもう結構この動画が世に流れているのでお名前を出すのですが、「かもめの玉子」という地域のお菓子の会社の方です。そこからよく市街が見えるものですから、そこから撮られた写真です。崖の上に避難されていて、そこの上から撮られたということになります。

これは今、左のほうへ水が流れてきますが、右側のほうが湾口で、左側のほうが湾の奥になります。こういうふうに家を破壊しながら真っ黒な水が流れ込んできているという、大変ショッキングな映像でございます【写真次ページ上】。この方は、地震が起きた後すぐに従業員と一緒に避難され、結局この会社からは誰もけが人を出さなかったということです。

次は行政が撮られた動画であります。これは岩手県の宮古という所で、市役所がお撮りになった動画です。これもテレビとかいろいろな所で何度も流されているので、ご存じだと思いますが、あそこの堤防を水が越えてこういうふうに入ってきます。すごい映像です

よね。【写真下】

この映像も先ほどの大船渡の映像もそうなんですが、大変よく撮れているのと、とても映像として価値があり、途中に起こっている、例えば携帯電話が普ツッと切れる時間だとか、そういうのが全てわかるようになっている、という大変有用なものです。災害の記録としては、過去にないほどいろいろな形で活用できるものではないかと



思います。

次のスライドをお願いします。今ご紹介しましたが、市町村からご提供いただいた写真や画像とか、住民からご提供いただいた画像をうまくリンクして、災害時の状況というのが時間的、空間的にわかるような形にできないかと、eコミマップの表現方法なんですが、立体的に災害がどんなふうに起こったかがわかるような仕組みをつくりたいと思っています。

この写真の下のほうにありますのが、気仙沼の被災前の写真です【写真次ページ】。右側にあるのは有名なコーヒー店で、私も被災前にコーヒーを飲んだことがあります。あの店も津波で今はもう跡形もないんですが、災害前の記録をだいぶんご提供いただいています。この災害前の記録と被災後の記録と場所を合わせて、どう変化したかということがわかるようにする、というのを今目標にしています。

現在、収集している写真は大変多いのですが、これを公開する前にいろいろと手続があり今それを進めております。準備ができ次第、順次これを公開する形で進めていきたいと思っています。



長坂さん、何かコメントはありますか。

【長坂】 今坪川さんから説明がありました通り、コンテンツだけではそこから解釈していろいろな対策とか教訓が読み取れません。実際に体験談と動画と静止画と、そしてどういう経路で避難できたかという地図ですね、これをつくっていくのはなかなか土地勘がないとできません。これは被災地の方と外の方がうまくコラボレーションしてやる。先ほどのようにいろいろな教訓が地域でも検証できますし、それを世界に向けて発信できると思います。収集しながらそれを公開するための編集を、ぜひ地域の方と一緒にやっていくという取り組みをこれから進められればいいと思います。

後はこれを活用するという視点でいきますと、自治体さんからいただいたものも、被災住民の方からいただいた動画とか写真も、全て2次利用となります。編集してさらにそれを発信していくことができるよう、権利処理を全てさせていただいております。インターネットで公開して投稿しているので自由に使えるといつても、よく見るとそれが了解を得て2次利用できるかどうかがわからない、というようなものがたくさんあるんですね。それをぜひ今、被災自治体さんと、地域コミュニティ、被災者自らが「これはみんなで使えるものにしよう」という権利の処理を、しっかりしておくということが大事だと思います。ぜひそういった方々を巻き込みながら、これからいっしょに集めていければいいなと思っております。

#### 大船渡市在住の中学生および大船渡市・陸前高田市民対象のワークショップから

【司会】 ありがとうございました。

次は6番目でございます。これはちょっと毛色が変わっており、「大船渡市在住の中学生および大船渡市・陸前高田市民対象のワークショップから」です。大船渡市の中学生とシニアを対象としたワークショップです。動画を、映画を、映像をつくっていただこうということでやっていただいております。「今、あなたが伝えたいことは?」というものです。

現在の活動状況は、NTTドコモの社会モバイル研究所と、私どもの防災科研と、大船渡市の教育委員会、NPO法人夢ネット大船渡さん、それからKOMさんなどの協力で、地域で映像をつくろうということをやっております。これは8月に大船渡市の中学生とシニアの方々に集まっていたとき、被災地域の住民自身が自分たちの状況を発信することが技術的にできるかということで、実際にやっていただきました。

次は、「3分間の短編映画をつくってみませんか?」というもので、地域で短編映画をつくって、自分たちは今こうなっているんだよとか、被災地はこうなんだよという状況を発信するということです。この活動のために、NTTさんがモバイル用の端末としてGALAXY Tabという小さなタブレットを貸していただきました。それを使って子どもたちと一緒にやっているのは東京工業大学の学生さんです。その操作を学生さんたちと地域の方々が一緒にやっています。非常に優れた端末で、すぐ操作を覚えて、次の写真のようにいろいろな所で映像をつくり、映画ができるようになったということです。でき上がった作品は21作品ありますが、今日は2作品を簡単にご紹介したいと思います【写真左：ワークショップの様子】。



#### 【動画再生：写真右】

【外国人ボランティア】 フランスから来ました、フランスのパリという町。20年前から毎年こっちに来るね。奥さんの実家は碁石だから。でも、今年はうち、流されたからみんなと一緒に泊まって、そしてボランティアの仕事しにきました。

【子ども】 何でこのボランティアをしているんですか。

【外国人ボランティア】 はい、この所はとても好きで、毎年夏休みに来るから、



そんなひどい津波に遭って、すごく地獄になったから、少しでも手伝うことができたら気持ちいい。ぜひなると思っている。

【動画終了】

【司会】 じゃあ、もう一作品あります。「災害を受けとめて（写真下）」というものです。

【インタビュー音声】 5か月間、どのように生活してきましたか。

【男性】 津波の当時は夢中になって逃げました。私の家はちょっと高い所なので津波なんか来ないと思っていたんですが、それがその津波の大きな波が押し寄せてきたので、竹やぶを切り抜けて、どんどんどおばあちゃんたちと一緒に逃げました。高いところへ逃げて、写真を撮つたりしました。次の日見たときに、ほんとにがれきに驚いているところです。で、うちも、毎日家に通って、そしてがれきを直したり、自分の家の残されたものを整理したり、ボランティアさんに大変お世話になりましたながら暮らしてきました。



【インタビュー音声】 今回の災害についてどう思われますか。

【男性】 新聞報道などで千年に一度という大津波だということで、みんな驚いています。それから、今までに被ったことのない大きな被害を津波で受けました。けれども、1つの津波というのは地球の営みであるということを捉えると、この津波より大きい津波が来ないということは一つもない。だから私たちはそれに備えて生きていかなければならぬと考えています。一つ、お見舞いに来た人に言われたんですが、貝塚は大きな波が来ても来ない所にある。昔の人たちはほんとうにそういう津波を、新聞報道も何もないときに、言い伝えで津波に対応した生活をしているんだなということをくづく感じました。このような被害に慣るよりも、私たちの人類の生き方について考えるときではないかなって、考えさせられた津波でもあったと思います。

【インタビュー音声】 将来、どのように暮らしていきたいですか。

【男性】 はあ、将来というより、今まで生きてきた80年というものを、ほんとうに私

はこれから大事にして生きたいなと、そう思っています。そして今まで歩んできた道のりにこれからも積み重ねて生きて、大事にしまって、それを保存したり、深く味わったり、そしてこれからの一瞬、一瞬を大切に、人間を味わいながら生きていきたいと考えているのが私の生活です。

【動画終了】

【司会】 ありがとうございました。

じゃあ、これは夢ネットの須賀さんにちょっと、実は先ほどのお子様はお孫さんだということなんんですけども、お孫さん、いかがでしたでしょうか。

【須賀（夢ネット：写真右）】 娘は神奈川のほうにいるんですけど、ちょうど夏休みで来ているときに、映画つくってみませんかということで、ボランティアは初めての体験なのでとても喜んで帰りました。

【司会】 ありがとうございました。

やっぱり被災者の方自身が情報を発信することがとても大事だということですね。これから課題としましては、著作権とか肖像権とかいろいろな問題があります。また、子どもたちはこの大きな災害で大変な心の傷を負っているのではないか、それらをきちんとフォローしながら、どういうふうに情報を発信していくとかいう問題があります。

これを使っては地域同士、住民同士で結構いろいろなコミュニケーションができる。今回は東京工業大学とか、今までこんなことがなければ縁のなかった方々が、災害で映像をつくるということを一つの取り組みにして大きくつながっていく、という結果が出ています。ぜひこういう取り組みを広げていただけないかなと思います。

長坂さん、何かコメントありますか。

【長坂】 きょう、今、ニコニコ動画でこのシンポジウムが流れているのですが、BGMの著作権とかは大丈夫？ あつ、オーケーなんですね、というような心配をしなくてもいいBGM集なんかも、ぜひ全国から参加型でプレゼントしていただきたいです。逆に被災して流れてしまって廃校になった小学校とか中学校で、著作権が切れた校歌とかを、例え



ばバイオリンバージョンだとか、ハーモニカバージョンだとか、オルガンバージョンなんかで演奏していただくことも、絆づくりになります。また楽譜をこのホームページに公開しておいて、それを全国からいろいろなバージョンで録音して、音声ファイルとしてプレゼントしていただく、というのもあるのかなと考えております。

### 行政の災害対応資料のアーカイブ～まずは遠野市から

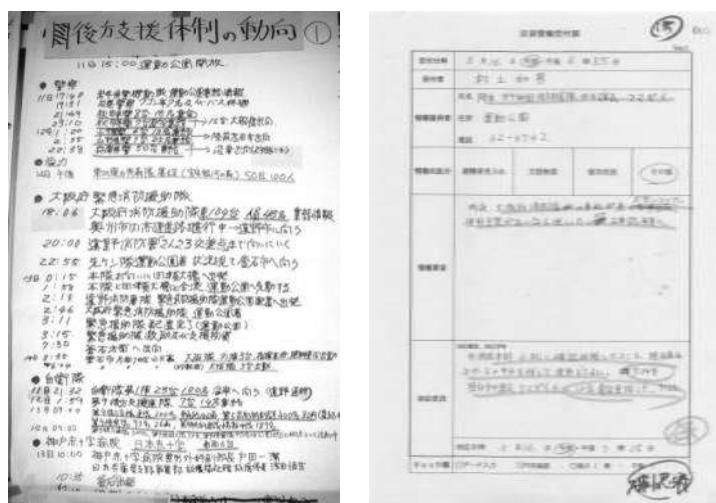
【司会】 ありがとうございました。

続いて7番目です。これは「行政の災害対応資料のアーカイブ」ということです。最初のチラシでは「遠野市等三陸地域地震災害後方支援活動のアーカイブ」となっていますが、実は遠野市だけではなくて、岩手県の被災自治体の中で遠野市さんが果たした後方支援の役割が非常に大きかったということで、こと他の自治体とがどういうふうな関係にあつたのか、ということを検証する意味も含めて、行政資料をアーカイブさせていただくという形をやっております。

先ほど遠野市の本田市長からお話をありましたように、遠野市の地の利というのを生かして、こういう広い範囲でご支援いただいたわけです。その遠野市を通じて支援に来た自治体というのは、この日本列島の地図にあるように、たくさんの自治体、地域の方が今日ここにもいらっしゃっていると思うんですが、遠野市に入ってこられて活動しているという状況であります。

行政資料と言いましてもいろいろあって、まず災害が起こると必ず災害本部にはこういう壁紙というか、白い壁に何時に何があったということをたくさん書かいて、ペタペタ張られるわけですが、これもきちんと残す。この壁紙記録というのは、遠野市さんに貴重な記録としてたくさん保存されていたので、これを撮影させていただきました【写真右】。

それから、情報受付票といるのは遠野市さんがつくられたもので、いつどんな連絡があつたかということを定型の書式にして記録し、次から次へと関係者に回すという処理



をされていました【写真前ページ右】。この2つの記録が残されていましたので、これを全部デジタル化して、何時何分に何が起きていたのかというのを整理したものが、このタイムラインというものです。これはなかなか結構大変な作業でした。

行政の今の職員の方々は普段の業務で忙しいものですから、なかなか対応が難しく、東京工業大学の大学院生、それからここに写真はありませんが、中央大学の学生さんにもご協力いただいて、これをアーカイブするということで、スキャンしてPDFにして、かつワードのファイルに入れるという作業をしました。これによって、遠野市で何時の頃にどんなことが起きたか、ということがわかるようになりました【写真下】。

遠野市タイムライン			
日 時 分	重要事象	出来事・被害状況	遠野市 行政対応
3月12日 16時		<地>米到着(10kg×10袋)そば3箱、木つゆ9本。みそ2袋	第6回本部会議 申告受付??(文字不明)の延期(16:00)
3月12日 17時			
3月12日 18時	停電、一部地域が18:45復旧見込み(18:37)	<地>打合せ大船渡の方、他市の受け入第一上中、第二南中、第三青地区(18:40) 大阪府緊急消防援助隊が遠野運動公園に22:30頃に入るとの遠野消防からの情報(18:40)	
3月12日 19時			大槌町への救援物資を置いて帰る(19:45)
3月12日 20時		<地>温かい夕食。保健士遠野病院へ運れて行った大槌町の方、糖尿病のため受?(文字不明)→入院(20:00) <地>青蟹駐在所暫官原さん来店(8:20)	遠野消防署「さんさき交差点まで大阪府緊急消防援助隊を迎えて行く(20:00) 市民センターで米30kg引き出し作戦に入った。(20:30)
3月12日 21時		市内一部地域の電気が復旧(20:50) <地>電気復旧した(21:05)	
3月12日 22時	兵庫県警50台集結→沿岸出向(22:38)	おにぎり400食差し入れ(22:00)	
3月12日 22時	兵庫県警(トカー・ワゴン19台、大型バス5台)釜石救援のため運動公園到着(22:55)→止とだぶり?	先遣隊(大阪府緊急消防援助隊?)運動公園着 状況を見て釜石市へ向かう(22:55) 兵庫県警(トカー・ワゴン19台大型バス5台)釜石救援のため運動公園到着(22:55)	
3月12日 23時			
3月13日 0時		本隊(大阪府緊急消防援助隊?)を迎えに由利大橋へ出発(0:15)	
3月13日 1時		本隊(大阪府緊急消防援助隊?)と田浦大橋で合流、運動公園へ先導する(1:58)	
3月13日 2時		遠野消防署隊大阪府緊急消防援助隊を運動公園配置へ出発(2:11)	
3月13日 3時		大阪府緊急消防援助隊 運動公園着(2:46) 大阪府緊急消防援助隊 配置完了104台、403名、運動公園などへ集結(3:11) 遠野消防による大阪府緊急消防援助隊の先導及び運動公園内安全管理	
3月13日 4時		大阪府緊急消防援助隊激励及び支援物資(3:15)	
3月13日 5時		<地>朝市長より他市の受け入場の確認、引き出しの確認のお願い(6:30)	
3月13日 6時		<地>集合打合せ(7:00)	

今後の展開ですが、やはり記憶が薄れないうちに市の職員の方々にどんなことが起きたのか、これは各自治体でも取り組まれていると思うんですけども、アンケート調査とかインタビューをして、きちんと記録を残す必要があるのではないかということです。これによつて空間的な後方支援ですか、連携調整機能に問題がなかったかとか、課題がなかったかということを確認し、これから遠野市さんと同じような役目を果たす自治体が、どういうふうに対策を取るのか、ということがわかるような形にしたいということです。

これにつきましては、遠野市さんの後方支援のご担当である菊池さん、どうぞ一言。

【菊池（写真右）】 遠野市の後方支援室の菊池と申します。



こちらの資料にある通り、壁紙で約60枚以上、そして定型の紙で2,000枚以上あります。どうしても職員の数も限られますので、ボランティアの方々にお願いして保存等、記録等を取ってまいりました【写真下】。今後の展開としては、職員の方々の記憶のタイムラインの隙間を埋めていく作業に、取り組んでいかなければなと考えております。(拍手)



#### 被災地の写真映像記録ボランティアの活動～延べ500人の協働

【司会】 ありがとうございました。

次は8番目です。今この会場でも写真を撮っていただいているが、この災害の記録を残すという作業のために、全国からボランティアの方々に被災地に入って写真を撮っていただきました。目的としましては、被災地の災害、被害の全体像を把握して、復興に向けての変化を記録するということです。全国から延べ500名というたくさんのボランティアの方々に、記録ボランティアというのをやっていただきました。彼らは自費でこちらへ来て、泊まって、自腹で全部活動していただきました。

デジタルカメラで被災地のまちなみ、避難場所、重要公共施設、鉄道や道路、橋梁、港湾、堤防、文化財、生態系、復旧・復興活動等を撮影して、位置情報を付与してインターネット上の地図で公開する。位置情

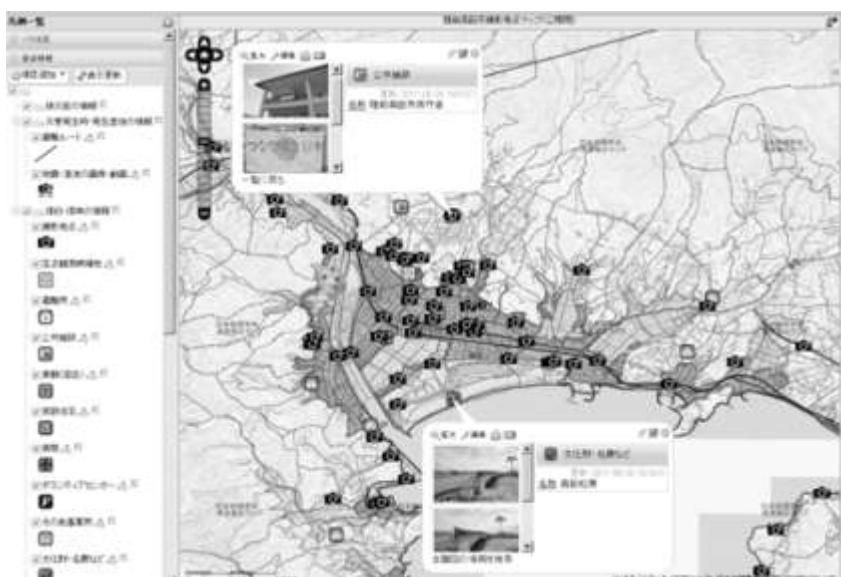


報を取るためのG P S ロガーという機材を、防災科研のほうでご用意させていただいて、それで撮っていただきました。次のページに今まで撮られた写真の枚数が、6万7,580枚と載っております。ちょっと地域によってデコボコはあるのですが、一応撮られているという形になります。

次に活動の様子、こんな形で写真を撮られているということになります。陸前高田で撮られた写真が次のページにあります。ここにカメラのマークで黒い点ですね、これが定点でこここの変化を追っていくけば、災害被災地が復興していく過程がわかる形になっています

#### 【写真右】。

やっぱり復興していく過程ではいろいろな計画の変更だとかがでてくると思いますので、定点が必ずしもいいとは限りません。時々見直す必要があるということです。それから、とても長い期間にわたると被災地が変わっていきますので、最初の半年ぐらいで写真が



撮られただけではとても終わらない。これから1年たち、2年たち、どんどん変わっていますので、継続的に息の長い活動にご協力いただけるようなボランティアの方々に入ってきていただく仕組みが必要と思われます。これも動画が確定しましたら、徐々に公開するという形で進めております。

続きまして、今日、来ていただいた方に一言ご発言をいただきたいと思いますが、はい、お願ひします。



【吉岡（記録ボランティア:写真右）】 東京から参りました吉岡と申します。私は東北・山形の出身で、今回の震災、自分でも何かできないかなと思って、この記録ボ

ランティア、映像の仕事をちょっとやっているものですから、それも何か続いてできればなと思って始めてみました。

最初、陸前高田のほうに行ったのですが、これが300キロの沿岸がずっと続いていると思うと、気の遠くなる思いを最初はしました。それを何とか、これからまた起こり得る地震とかに何か役に立てればなど、どんなものでもいいので、もうとにかくすべて撮り尽くそうという想いで今回参加しました。今後もまた長期的にその活動に参加できればな、と思っております。(拍手)

被災地の災害FM放送のアーカイブ～コミュニティFMは何を伝えたか

【司会】 ありがとうございました。これをニコニコ動で見てらっしゃる方がいて、我也  
という方がいたら、ぜひお声を上げていただければと思います。

続きまして9番目、「被災地の災害FM放送のアーカイブ」、コミュニティFMというのが災害後あちこちで活動しています。実はコミュニティFMが活動を始めたのは今回の震災が最初ではなくて、阪神のころから動いていますが、そのコミュニティFMがどんなことを放送したかということを記録して残していく、これもアーカイブのとても重要な活動だということでやっております。



上の写真は「おおふなとさいがいエフエム」というところの活動で、放送されているところの状況です。「おおふなとさいがいエフエム」では、実際に放送した原稿をホームページで公開しており、インターネットを通じて見れば、何がしゃべられたかということを文字で見ることができます【写真右】。

	大阪府立総合防災センターは、大阪府の防災・減災・復旧活動を統括する組織です。本部は、大阪府立総合防災センター内にあります。	5-17000 5-17000 06-6321-1111																		
お問い合わせ窓口																				
<p><b>お問い合わせ窓口</b></p> <p>〒537-0001 大阪府大阪市住之江区見附3丁目1番1号</p> <p><b>お問い合わせ窓口</b></p> <p>電話番号：06-6321-1111（受付時間）</p> <p>受付時間：平日午後 9時～、13時～、15時～、17時～</p> <p>休業時間：午前9時～</p> <p>TEL：06-6321-1111</p>																				
<p><b>連絡用封筒宛名</b></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th style="width: 15%;">封筒印</th> <th style="width: 85%;">封筒印</th> </tr> <tr> <td>明治20 (日)</td> <td>明治20 (日)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (月)</td> <td>明治20 (月)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (火)</td> <td>明治20 (火)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (水)</td> <td>明治20 (水)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (木)</td> <td>明治20 (木)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (金)</td> <td>明治20 (金)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (土)</td> <td>明治20 (土)</td> </tr> <tr> <td>明治20 (日)</td> <td>明治20 (日)</td> </tr> </table>			封筒印	封筒印	明治20 (日)	明治20 (日)	明治20 (月)	明治20 (月)	明治20 (火)	明治20 (火)	明治20 (水)	明治20 (水)	明治20 (木)	明治20 (木)	明治20 (金)	明治20 (金)	明治20 (土)	明治20 (土)	明治20 (日)	明治20 (日)
封筒印	封筒印																			
明治20 (日)	明治20 (日)																			
明治20 (月)	明治20 (月)																			
明治20 (火)	明治20 (火)																			
明治20 (水)	明治20 (水)																			
明治20 (木)	明治20 (木)																			
明治20 (金)	明治20 (金)																			
明治20 (土)	明治20 (土)																			
明治20 (日)	明治20 (日)																			
<p>ドライアイル(封筒)には、Adhesive(アディティブ)で貼ります。入札ID: 10015</p>																				
<p><b>ご購入の際の注意事項</b></p> <p>販売店名：明治20 (日)</p> <p>販売者名：(06-6321-1111)</p> <p>販売価格：(06-6321-1111)</p> <p>販売期間：(06-6321-1111)</p>																				
<p><b>ご購入の際の注意事項</b></p> <p>販売店名：明治20 (日)</p> <p>販売者名：(06-6321-1111)</p> <p>販売価格：(06-6321-1111)</p> <p>販売期間：(06-6321-1111)</p>																				

現状の課題は、関連組織ということで「エフエムわいわい」の日比野さんにお越し頂いた

だいていますが、「せんだいメディアテーク」とかの同様のアーカイブ組織と連携したいということです。今後の展開としましては、音声ファイルというものをどう活用するのかというものがあります。放送されているのがかなりの時間量ですので情報量が多く、これはどう活用していくのかという問題があります。これについて佐藤さんはいらっしゃっていますでしょうか。ぜひコメントをお願いします。



【佐藤（写真左）】 「おおふなとさいがいエフエム」の佐藤と申します。よろしくお願いします。各関係組織との連携についてですが、こちらもかなり市役所からの重要な情報、データを放送で流していますので、確実にアーカイブをして後世に残して今後の対策に使っていただければと思います。

私はもともと放送の経験はなくて、治療院の院長をしていたのですが、開局からFM放送のほうに携わらせていただいている。私自身も先ほど大船渡の齋藤製菓さんの動画にもありました。あそこのすぐ脇にあった治療院が全て流出しております。私も避難所生活、現在は仮設生活をしていく中で必要な情報を皆さんに伝えたい、同じ目線で情報提供を災害からずっとさせていただいている。ほんとうに有用性を感じていますので、これからも各団体さんと連携を取って、市民参加型の放送になればよりいい情報が流せるんじゃないかなと思っております。

ありがとうございます。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。それでは、その災害FMの大先輩である「エフエムわいわい」の日比野さんに一言お願いします。

【日比野（写真右）】 神戸から参りましたエフエムわいわいの日比野です。今回、私たちは災害FMで放送している内容を同時に録音できるよう、パソコンとハードディスクを北から南までお渡ししてきました。これは17年前、当時私たちがやっぱりできなかつた、失われた記憶はもう取り戻すことができない、という思いでやっていったんですね。

それともう一つ、今佐藤さんがおっしゃっていましたが、最初は災害の情報だけですけど、少しずつ、少しず



つその地域のまちの人たちがいろいろなことを語り始める。遠野というのは民話の古里ですけれども、ラジオは実の話を伝え、その話の輪をどう残していくのかと、それを今後もどう活用していくのかというのが、とっても大きな課題だと思っております。(拍手)

### 被災地の災害ボランティア活動と体験談のアーカイブ

【司会】 ありがとうございました。日比野さんには第3部でもぜひご発言いただきたいと思います。

それでは次が10番目、「被災地の災害ボランティア活動と体験談のアーカイブ」です。今回も全国からたくさんのボランティアが被災地に入りました。ボランティアセンターでの活動内容、ボランティア体験談というのをアーカイブして、どんなボランティア活動をしたのか、あるいはボランティアセンターでどんな問題があったのかということをはつきりさせるために、そのへんを集めようということです。

実は、宮城県のボランティアセンターは、宮城県の社会福祉協議会を通じて、私どもが少しシステム的な支援をさせていただいた関係で、たくさんのボランティアの方々に情報の面で支援させていただきました。そこで、ボランティアの方々にネットワークで声をかけて、いろいろな形で意見を投稿していただくというのをウェブサイトでやっております。

ボランティアで情報支援をしていますと、やはり地域で使ったいろいろな「どこどこではこんな活動をしました」「こんなニーズがありました」というような生の声があり、それらを含めてたくさんの情報が上がってきます。これらを集めて、地理的に「こここのところではこんなことがあったんだ」ということをわかるようにしたい。

今後の課題ですが、今、宮城県で動いていますが県の被災地によっては、いろいろな災害ボランティアのまとめ方、中心に活動されたボランティアセンターの役割だとかが随分違いますので、それらをどうまとめて分析するかという課題があります。また、市町村社協を通じて取材するということで、いつどんなことがボランティアセンターで行われていたかという運営の記録についても、まとめておく必要があると思います。これらを含めて生活支援活動の記録、整理をする、仮設住宅に入られた被災者の方々が大分多くなっています、その方々への生活支援活動についても記録していくということがあります。

このボランティアの支援をしているということで、池田さんに一言ご挨拶していただきたいと思います。

【池田（写真：次ページ）】 ご紹介にあずかりました池田と申します。今、宮城県のボラ

ンティアセンターでは、災害ボランティアセンターのホームページをeコミュニティ・プラットフォームでつくっておりまます。災害ボランティアセンターのスタッフさんが日々ブログを更新したり、災害ボランティア活動の記録を取っておりまます。皆さんは、当然記録を取るという意識を持っている方ばかりではないと思うんですが、常に自分たちの情報発信を行なうということが、そのまま記録を取ることにつながっているという点において、アーカイブスという形で今回ご紹介いただいております。

今後ですが、多様な情報がこうやって発信、記録されていく中で、しっかりとまとめていくこともまた大事になると考えております。応援、よろしくお願ひします。(拍手)



### 地場産業の復興アーカイブと民間コマースサイトとの連携

【司会】 ありがとうございました。地域でボランティア活動をされた方で、この放送を見てらっしゃったら、ぜひ皆さんの体験を声として投稿していただければと思います。

次は11番目、「地場産業の復興アーカイブと民間コマースサイトとの連携」というのがあります。これは被災地の地場産業が災害でやられてしまい、それをどうやって復興していくのかという過程がとても重要になります。これをアーカイブしようということです。

今日、最初にご紹介しましたKOMなどのチームが、実際に被災地の復興過程を取材し、インタビューして記録を残すという形で配信しています。やっぱり被災地のいろいろな製品、例えばお酒ですか食料品ですかの正しい情報が発信されていけば、とてもおいしい物がこちらにはありますので、三陸地方のとてもいい物を全国のいろいろな方々が安心して購入できる形ができ上がれば、被災した産業もうまく復興していくんじゃないかな、そのための商品購入の仕組みをつくろう。今すぐにはなかなか品物はできないけれども、1年先には工場が立ち直るから、そのころには買えるんじゃないかな、という少し先取りした情報も流しています。

取り組みの写真が出ています。工場へ行って今こんな形でやっていますよと、これは味噌ですけども、それをウェブで公開するというものです【写真次ページ】。

これに関しまして実際に取材したKOMの皆さん、どうでしょう。地場産業の復興過程で実際に苦労されていることに、何かコメントはありませんか。こんな現場を見たとか、

何かあつたらぜひ一言お願いします。若者の声で、はいどうぞ。



【遠野（KOM：写真下右）】 今までにもいろいろな企業のほうにお伺いして、インタビューしてきたんですが、今後も、まだまだ復興させ再開している会社とかもあるので、被災前みたいに再開できるのかをいろいろ聞いていきたいとも思います。後は、今後どうしていきたいとも気になりますので、そういったところも伺

って自分たちのホームページにアップしていきたいと思います。（拍手）

【司会】 ありがとうございます。  
した。

【台（KOM：写真左）】 とても陸前高田が大好きなので、地元の復興に少しでも貢献できるように若い力で頑張っていきたいと思います。よろしくお願ひします。（拍手）



#### 測量車両による360度映像と測量のアーカイブ

【司会】 ありがとうございました。何か優等生のような発言になってしまいました（笑）。災害が起きると、大きな企業だけが生き残るのではなくて、ほんとはこれをひっくり返して、逆に今まで知られていなかったものが全国に名前をアピールするいいチャンスだと思うんですね。そういう意味で地場産業が活性化するということは、被災地の復興経済を支える肝になりますので、ぜひそこは皆さん、ご協力いただけないかなと思います。

あと二つになりました。12番目「測量車両による360度映像と測量のアーカイブ」、これは実は車に360度写せるカメラと、GPSといって位置を記録するものとを搭載して、被災地の映像というのを撮影し、被災後の写真、それから復興していく過程を写真で記録し、津波の痕跡とかそういう研究に使えないかということです。

これには技術的な問題があり、「NTT空間情報」さんに協力してやっていただいています。陸前高田市などの市内を走破してデータの編集作業を実施するで、車の上にこういうちょっと不思議なやぐらを組んで、アンテナを張って走りながら被災地の状況を記録していきます【写真右】。

これは「NTT空間情報」高橋さん、お願いします。

【高橋（写真下）】 「NTT空間情報」の高橋と申します。今日は東京から参りました。実はNTTもなかなか認知されないので、被災企業なんです。津波では70のビルが浸水倒壊で、6万本の電柱、マンホールに被害がありました。



我々も3.11以降、こういった空間情報を自ら整備しており、今回、防災科研さんを通じて陸前高田さんと大船渡さんの行政からも要請があって、先ほどの景観測量作業、これはただ単に映像を撮る車両じゃなくて、緯度・経度、あと高さ、X-Y-Z軸が誤差十数センチ程度の精度を誇って撮れるアーカイブです。

まだ全エリアを走行して撮り切れていません。ちょっと精密機械的な車両で、浸水の所があるとすぐに壊れてしまう部品がありますが、ぜひとも海岸部すべてをNTTとしても撮っておきたい、それを行政さんと官民連携の形としてアーカイブを残していくたいと思っております。よろしくお願いします。（拍手）

#### 復興情報杭とスマートフォン等による復興過程の定点撮影とフィールドミュージアム構想

【司会】 ありがとうございました。

いよいよ最後になりました。「復興情報杭とスマートフォン等による復興過程の定点撮影とフィールドミュージアム構想」という、また片仮名が並んでしまいました。先ほど、復

興していく過程を写真撮影で定点観測するという話をしましたが、これは、記録した写真そのものを、その現場で見られるようにするために、復興情報の杭というのをつくっておく。そこで撮られた写真とか、昔の写真とかを杭の上にQRコードというもので記録して、そこへ行ってスマートフォンとか携帯電話をかざして写真を撮ると、その情報が出てくる。ここは以前はどんな所であったのか、被災直後はどうなっていたんだということがわかるような記録をする、ということになります。

舞台の左手にありますのが現物の復興杭です。結構大きいものだと思うんですが、その

杭を地面に打ち込んで、その情報を記録するという形になります。そこに携帯電話をかざし



ます。杭の建立式の写真が出て  
いますが、そういう形で撮られたものです【写真上】。

課題としましては、復興杭というものを設置するためには場所が要ります。たったこれだけの土地なんですが、やっぱり土地に物を残すためには許可というか手続が必要なのです。また、これはICタグに対応させるために今はQRコードで代用していますが、スマートフォンではまだICタグには対応していない、という問題があります。一応現在1,000本を目指して、大船渡市、気仙沼市、陸前高田市でも展開できないかと考えています。それから、ここにこういうものがあれば、観光に来た方がその杭の上で自分がそれをかざすことで、「あっ、ここはこういう所だったんだな」ということがわかって、地域の観光資源

にもなるのではということです。

この杭を含めて、民間企業の協働がとても欠かせない状況になっており、(株)リプロの岡田さんにぜひコメントをお願いします。

【岡田(写真左)】 株式会社リプロの岡田と申します。杭



はただの杭ですが、QRコードとかICタグを埋め込んで、デュアルというかいろいろな用途に使える杭です。そういう現場の認識としては杭が非常にいいもので、あとはそういう仮想空間と現場の杭をうまくつなげて、情報を現地でその位置で取りまとめるということを考えています。杭もたいしたものではないんですが、大分のNPOさんとかとペットボトルのキャップを集めて杭をつくっていく、そういうリサイクルで皆でやっております。

今後の課題としては、やはり杭を勝手に打つというわけにはいきませんので、各市町村さんにご協力いただいて、効率のよい設置をしていきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。（拍手）

#### 在福島民放テレビ局フィルム素材の救済

【司会】 ありがとうございました。

皆さんが飲んだペットボトルのキャップが溶けてあの杭になるんですね。そう思ってぜひペットボトルをたくさん消費していただいて、被災地の支援につながればいいですね。

すみません、追加がございました。その他ということで、「在福島民放テレビ局フィルム素材の救済」というのがあります。福島にある民放テレビ局の開局以来のフィルム素材、今はデジタルになっていますけれども、フィルムで記録した素材が結構あり、これが津波の被災に遭い、専用の保管庫から本社社屋に一時避難しているという状態であります。このタイトルが2,000タイトルあるということで、とても重要な記録です。

このフィルムは、テレビ局が撮影した1963年頃から20年間の福島の記録ということで、カタログを見たら東京オリンピックも入っているような古い記録のようなものです。これらのフィルムが失われないようにするために、オリジナルのフィルムを保管するだけじゃなくて、これをデジタルに変換して、無くならないような形にする作業が必要です。これについて、ぜひご協力いただけるところがあつたら名乗り出ていただけないかな、というのが私どもの思いでございます。

ご存じのようにこのアーカイブという取り組みは、どこどこの会社が仕事としてやるというのではなく、それぞれが協働でやるという形になりますので、我こそはという方は、自分のできる肩幅で手を挙げて参加していただけないかな、というのがお願いでございます。これは吉見先生、何かコメントをお願いできますでしょうか。

デジタルの時代であっても、現物のフィルム保存はとても大切



【吉見(写真左)】 今、ご説明あった通りだと思うんですけども、これは別に福島放送だけじゃなくて、東北のいろいろな放送局やラジオ局で放送素材をどうやって記録するか、残していくかという問題があると思うんです。

今、デジタルっていう話がありましたけれども、デジタルもそうなんですが、現物のフィルムの保存ってとっても大切なんですね。現物のフィルムは温湿度管理をちゃんとしないと、ワカメのようになります。ワカメのようになってだんだん腐って酢酸臭を発してきますから、現物を残しておくスペースをどこかにちゃんとつくるとか、さっきのいろいろな記録もそうなんですがデジタルにすればいいっていう話じゃないんです。そうじゃなくて、人々のアルバムとか、人々の残したいいろいろな物を、ちゃんと現物で残すということを同時にしないといけない。

これもその例で、デジタル化はもちろん大切ですが、この現物のフィルム、原板そのものをどういう場所に、温湿度管理する場所にちゃんと残していくのか、東北のいろいろな遺産そのものを残していくということを、ちゃんと考えないといけないと思いますね。それがデジタル化というときに一つの落とし穴があって、やっぱりデジタルで解決つくと思うなよって、物を残せよということをあえて今ちょっと発言させていただきました。

【司会】 吉見先生、ありがとうございました。この後、吉見先生には第3部でも大いに吠えていただかなければなりませんが、遠野はとても寒い所だということで、遠野市に冷凍保管庫を設置していただけるとありがたいなと、個人的には思ったりするのですが……。

ということで、第1部ではアーカイブでのいろいろな取り組みをご紹介いたしました。何度も申すようですが、アーカイブというのは協働の取り組みで、私ども防災科学技術研究所はその一つの部分を担っているだけに過ぎません。多くの方々にご協力いただきないとアーカイブは回らないという状況になります。ぜひ皆さんのご協力をいただきたいと思います。

このアーカイブのページというのは、今見られるようになっています。この活用につきましては、この後の第2部で、集めたものをどうするかということを8人の方々にご登壇いただきて、ご議論いただこうと思います。

第1部、どうもありがとうございました。（拍手）

（ 休 憇 ）